

市民合唱の指導に情熱

底辺の拡大に貢献も

「合唱は多くの仲間が一つの歌をつくりあげる同時体験。それは感動的なものです。とかく寂しい人生の中で、ひと時、心が輝く瞬間があってもよいではないですか」その言葉の奥に音楽に対する理念

から、腕力で人間を表現しようというこれまでの自分の制作姿勢のふらちさを思い知った」という。見えてくるままに、自然が語りかけてくるままに、素直に従った色彩表現は、ヨーロッパ旅行の大きな収穫。今年七月に開いた個展への評価も、その進境に対するものだ。

昭和三十二年、斜里郡清里町に生まれる。三十四年、道学芸大学（現在の道教育大）を卒業し、阿寒町共和中学校に勤務。部落までトロッコで入るような、辺地の人々の生活に触れたことが、のちの絵画制作のテーマの底流となったようだ。四十四年から一水会展、道展に入選。四十五年は釧路市日

進小学校勤務。四十七年、道展で財界さっぽろ賞受賞。五十年、「流水のまち」が釧路市買い上げに。五十一年から釧路市東中学校に勤務し、現在に至る。五十四年に第一回個展。五十六年、ヨーロッパ美術研修旅行。今年の一水会展で佳作賞受賞。七月に釧路で二回目の個展開催。釧路市武佐四の二九。



〈音楽〉伊藤 功俊さん

がうかがえる。教育大教授の忙しい身で、市民の合唱指導にも情熱を傾け、ママさんコーラス、市民

合唱団など底辺を広げてきた。伊藤さんが市民コーラスの指導を手掛けたのは昭和三十三年、釧

路放送合唱団（現在の釧路混声合唱団）と出会ってから。四十八年、公民館の成人学校講座で「お母さんコーラス」の講師をつとめてから主婦や社会人を対象に合唱指導の幅を広げた。「お母さんコーラス」はのち「百合の花合唱会」に発展。転勤族夫人が多くてメンバーの入れ替わりがあっても、活動を続け、来年は十周年を迎える。

市内にいくつもある合唱サークルにとって大きなエポックとなったのは「第九」の合唱。第一回の「第九」合唱が実現したのは五十三年。市内に十五以上あったサークル三百八十人が伊藤さんの指導で心を一つにして歌いあげた。母親、OL、サラリーマン、学生、それぞれの職業の違う市民が伊藤さんのタクトに声を揃えた「第九」の合唱は三年間続き、内外から多くの反響を呼んだ。現在伊藤さんが指導しているもう一つの市民合唱団「コールフロイデ」も「第九」をうたうためにできたもの。「うまい、へたではない。また難しい曲に取り組むことが素晴らしいのでもない。道端の花でも見る人によっては美しいように、歌うことで自分の中の何かを再発見できれば」と合唱指導に変わらぬ熱意を注いでいる。